

【研修参加学生の報告書から】文化人類学実習

・今回の文化人類学実習では、韓国人学生との交流の機会が多くあった。調査では多くのアイデアを出してくださったり、通訳してくださったり、かなりの協力をいただいた。様々なアドバイスをもとに話し合いを行っていくうちに、韓国人の持つ考え方や、価値観を知ることができた。私たちのグループの調査テーマが「軍隊」であったため、韓国人が軍隊に持つ印象や考え方も知ることができた。日本にはない文化や組織形態であるため、想像することが難しいテーマであったが、インタビューを通して、少しでも韓国人学生が持つ軍隊についてのイメージをつかむことができたのではないかと考える。また、調査以外にも韓国人学生とコミュニケーションをとる機会が多くあった。韓国人の価値観や考え方に触れることができたのではないかと考える。韓国人学生と触れ合っていくうちに、うまく自分の考えや思っていることを伝えられない、理解が難しいなどの問題もあったが、お互いに理解し合おうという姿勢が重要なのだと考えた。このような体験を通してグローバルな視点や能力を得ることができたのではないかと考える。(法文・2年)

・特に大きな気付きと言えることは知識についての考え方が私の中で変化したことだ。当初は昨今の日韓関係の悪化による影響を鑑み、韓国への渡航は危険なのではないかと考えていた。しかし、その不安は私が韓国という国についてよく知らなかったことから来ていたものなのではないかと今は思っている。実際に現地に行ってみると、全北大学校の方々は、忙しい時期であるにもかかわらず、私たちの研究に積極的に協力して下さった。また、昨年同じ研修に参加していた鹿児島大学の先輩も同行し、手助けをして下さった。全北大学校の方々と先生方、先輩方などたくさんの方々のおかげで、私たちの班はとても良い研究成果が得られ、また良い発表ができたように思う。私は、自分が勝手なイメージだけでその国や人々を判断してしまっていたことをとても恥ずかしく思った。知らないことに対して向き合い、知ろうとする姿勢は、私たちにとって非常に重要であり必要不可欠なものである。その姿勢がグローバルな視点や能力というものにも繋がってくるのではないかと私は思う。(法文・2年)

・日韓関係が過去最悪と連日報道されている中での調査となったので出発前には不安もあったが、その心配は必要なかった。現地へ赴き、自分の目で現状がどうなっているかを確かめることが大切であると学んだ。研修では、私のグループは「徴兵制と大学生」を大きなテーマとして調査を行った。徴兵制は日本にはないシステムなので、インタビューの細かいニュアンスまで把握するのは大変困難なことだった。自分が韓国語をもう少し習得していればと思うことが多々あった。言葉が分からなくても人と人は友達になれることも学んだが、そのあと仲を深めていくためには共通の言語が必要であることを実感した。実際に海外に行くことで勉強したいという思いが強くなった。(法文・2年)

・日本と韓国は少し関係が良くなかったため、往路の飛行機が運航中止になったり、街の至るところに日本製品の不買運動を促すポスターが貼ってあったりして、初めは韓国での研修に参加することが不安だった。しかし、韓国人の人はとても優しい人たちばかりだった。同じグループの韓国人はとても長い時間を私たちのために費やして私たちの課題にも本当に親身になって考えてくださったし、市場では私たちの調査に快く応じて下さる方もいて本当に感動した。私たちが持っている情報であったり、考えているイメージであったり、ネットやテレビなどで報道される内容というのは、実はとても一方的で偏ったものであるのではないかとということを学ぶことができた。また、コミュニケーションを取る大切さや楽しさを学ぶことができました。私は韓国語を学び始めてから日も浅く、あまり話すことが上手ではないのですが、初めて韓国人の人たちとたくさん韓国語を使ってコミュニケーションを取る機会を経験して、自分の韓国語が相手にきちんと伝わったときや、相手が話していることが理解できたときなど本当に嬉しくて、もっともっとたくさん話を話したい、そのためには語学の勉強を頑張ろうと思うようになった。(法文・2年)

・全北大学の学生と交流する中でグローバルな視点や能力を得ることができた。私のグループは「アルバイト」を大きなテーマにし、韓国の大学生がアルバイトをする理由や稼いだお金をどのように使っているのかをインタビュー調査を行った。日本語学科の学生が同時通訳をしてくださったおかげで、スムーズに全北大学の学生とコミュニケーションが取れた。アルバイトをして得たお金の使い方として、全北大学と鹿児島大学の学生の方々と差異が出た。全北大学の学生の中には料理教室に行ったり、水泳を習ったりしている方もいて、鹿児島大学の学生にはみられないお金の使い道であった。韓国では日本以上に上下関係がはっきりしていると身を持って感じた。最初は韓国の文化や環境など日本と異なる部分に戸惑ったが、韓国人と交流し、適応していくことで、新しい韓国を知ることができた。今回の研修を通して、今までの生活では経験できないようなことや発見をすることができ、グローバルな視点や能力を得ることができたのではないかと思う。(法文・2年)

・研修時、日本と韓国は政治的にはとても緊張した状態にあった。そのため当初乗る予定であった飛行機が欠航になったり、韓国の街には反日をあおるような横断幕もあったりした。韓国に行くのに多少の不安もあった。しかし、実際に韓国で調査をしてみると、そのような不安を感じる必要はないとわかった。全北大学の学生さんたちは暖かく歓迎してくれて、調査の内容以外にもいろいろなことを話した。街で話しかけてきた男性は、日本から来たことを知ると、楽しんでいてね、と笑いかけてくれた。日本のニュースでは、政治家の話や、民間の人々へのインタビューも反日的なものがピックアップされて取り上げられているので不安だったが、韓国の一般の人々はとても親切であった。私は外国人の知り合いや友人はこれまでいなかったのに、外国の情報はテレビやネットのニュースで得るしかなかった。しかし、そのようなメディアからは政治的、経済的な情報しか得られないことが多い。もちろんそのような情報も重要ではあるが、私が外国に行った際にその国について印象付けるのは実際に行った土地や実際に話した人々である。その人たちがニュースと同じ考えをしているかはわからない。ニュースで知った情報をもとにあまり構えすぎてしまつては、楽しむこともできないし、異文化への理解も遅れてしまうということに気づいた。

(法文・2年)

・言語が通じない環境の中で韓国人から知りたい情報を聞き出すために日本語を話すことができる韓国人に翻訳してもらったり、インタビューの回答の際に日本語を話すことができる韓国人に日本語で回答してもらったりした。調査の中で韓国人にとっても助けられていたように感じた。韓国人の方々はグループワークの際に自分の意見などをたくさんあげてくださった。グループワークのような機会での自分の意見をしっかり持っている点は日本人の学生よりも優れているように感じた。韓国での調査も韓国人の方々が意見を出して下さるため、インタビューで聞く質問もすぐにまとまった。私自身グループワークでは自分の意見を発信することは得意ではない。しっかり考えを発信することで、日々の学習の機会をより充実した物に変えられる。今後グループワークをする際により自分の意見を発信できるようにしたい。今回の調査で、韓国の現金贈与に注目したが、韓国人の話の中から少しではあるが韓国の文化等について知識を得ていった。日本と違う点や似ている点が多数あり、とても興味深かった。また調査の中で私たち自身が日本の文化等に関する知識が少ないという点も浮き彫りになった。

(法文・2年)

・日本語を話さない外国人と交流するのは初めての経験で、自分の母語が通じなくても他の手段を使えばよいということに気づくことが出来た。以前は、言語の壁や文化の違いによって外国人と話すことに抵抗を感じていたが、違いがあるからこそ話していて楽しいということがわかった。日本でも韓国でも存在する同一の状況が、韓国では言葉になっていた。違いだけでなく、韓国語で日本語と似たような定義を持つ言葉があることも知り、言語と文化の相違に興味を持った。私たちがお世話になった韓国人は日本と韓国の文化の違いを理解していて、私たちの滞在中に困ったことや嫌なことがないように対処してくれた。例えば、韓国の食べ物には多くの日本人にとって辛く食べ慣れないものがあるので、気にせず残しても良いと言ってくれた。他には外を歩く時に日本人学生だけでは危険だからと、必ず韓国人の学生が道案内と付き添いをしてくれた。食事やその他の生活面で、外国に来た私たちへの配慮が感じられた。韓国人の方々から、実習内容だけが目的ではなく、韓国を楽しんでほしいという思いが伝わった。お世話になった韓国人のおかげで、楽しく有意義な実習になった。東京オリンピックに向けておもてなしの心が必要だと言われている中、おもてなしとは具体的に何なのかかわかっていなかったが、今回の研修で外国人としておもてなしされることによって、外国人へのおもてなしとは何かを学んだ。

(法文・2年)

・今回の研修での成果の一つは、異文化交流である。今回の研修は自分たちの調査を進めることが一番の目的ではあったが、それと同じぐらい今回の研修で行った異文化に触れるという機会は貴重であった。調査以外にも私たちのしたいこと、やりたいことをしようとしてくれた全北大学の学生のおかげで、息抜きができた。もちろん、韓国人と話すことで気づくことも多くあったが、目で見て、肌で感じて、韓国と日本の違いが至るところにあることがわかった。このような異文化に触れた際に、自分の持っているものさしではからなかったという点は大きな成果であるように感じる。次に、調査についての成果である。私たちは、「韓国の現金贈与」について調査した。調査していく中で、韓国と日本の包装の有無が気になり、調査を進めた。これが正解かどうかはわからないが、自分たちなりに今回答えを出すことができ、これからの課題も見つけることができたのでよかった。今回の研修を終えて、文化人類学とはどういうものなのか、異文化理解とはどういうものなのか、どうしてグループ活動であったのかということを知ることができた。

(法文・2年)

・今回の研修を通じて学んだことは、自分が少数派になって初めて自分にとっての当たり前を知ることが出来るということだ。私が今までしてきた海外体験は全て日本の中で体験したものである。しかし、今回の研修では周りにはほとんど韓国人しかいない中で、自分が実際に見聞きし、疑問に

感じたことを学ぶことが出来た。外国で自分自身が生活してみて初めて疑問に思うことがあるということを感じた。次に語学力と聞こうとする姿勢の重要性である。今回の研修では日本語を話せる韓国人学生達に協力をしてもらったが、難しい表現や専門用語が多かったり、日本語が全く話せない韓国人学生がいたりした。そんな中での調査やコミュニケーションは最初の頃は想像していたよりも難しかった。しかし調査を進めていく中で、こちら側が理解しようと一生懸命に聞いたり調べたりしていると韓国人の学生たちも一緒になってとても熱心に協力してくれた。たとえ違う国の違う文化を持つ人同士でも、自分たちのことを知りたい、理解しようとしている人たちに対して雑な態度をとる人はほとんどいないのではないだろうか。自分たちの姿勢次第で相手との関係性は大きく変わるのだということを改めて学ぶことが出来た。今回の研修を通して、これまでに学んだ韓国語を実際に使って上達させることが出来たとともに自分の力が不足している部分にも気づくことが出来た。現地の言葉を知ろうとし、使おうとすること、真剣に学ぼうとすることが異文化との交流の中でいかに重要であるかを学ぶことが出来た。(法文・2年)

・短期間でも韓国の衣食住文化に多く触れることができたと感じている。日本と韓国は地理的には近い場所に存在しているが全く異なる部分が多々あった。日本では悪いマナーとされていることが韓国では良いマナーとされており、またその逆もあった。日韓の差異に驚くこともあったが、日数を重ねるにつれ、韓国の文化に少しずつ慣れてきている自分がいたように思う。また、この研修でグローバルな視点を得られたのは、韓国人学生とコミュニケーションをとる機会が多く設けられていたことも大きいと思う。調査を進めるうえで、韓国人留学生に何度も支えてもらった。彼らの助けなしでは調査を行うことはできなかったと思う。調査を進めていくうえでのアドバイス、また、食事などのプライベートな時間に行った雑談などから、韓国人の持つ考え・価値観を感じる事ができた。彼らにとっては何気ないような動作も、私たちにとっては日本でなかなか見られないため新鮮であったり、私たちがあまり重要視していないようなことを韓国では重要視していたり、国が違うことでこんなにも人間の考え方は異なってくるのかと感じた。私たち日本人の考えや価値観に縛られて調査をするのではなく、韓国人の考え方や価値観も尊重しながら調査を進めることで、グローバルな視点を含んだ調査結果を出すことができたのではないと思う。(法文・2年)

・今回の韓国研修に参加することによって、グローバルな視点を持つ事ができたと感じる事がいくつかあった。生活様式、食文化、人間関係など私が慣れ親しんだ文化との違いに気づく事ができたのは言うまでもなく、私が最も考えが変わったと思ったことは日韓の情勢問題についてである。私たちが研修に向けて準備を続けている間、軍事情報包括保護協定をめぐり、日本と韓国の関係はどんどん悪化していった。そんな一抹の不安とともに赴いた韓国では実害は全くなく、日本人である私たちを見て嫌な顔をする人には全く会うことはなかった。そうはいっても日韓関係のぎこちなさを感じる場面もあった。街を歩いていると日本政府を批判するポスターが電柱という電柱に張っている通りがあり、タクシーのラジオから日本を批判する放送が流れたこともあった。そんな時はなんだか少し居心地が悪くなるのだが、毎回全北大学の学生は政府がおかしいとか、そんなことみんなは思っていないと声もかけてくれて気持ちが楽になった。このような経験から日本の中にいるだけでしか得ることのできない情報だけで外国に対して勝手なイメージを持つのはとても失礼なことで勿体無いと感じた。(法文・2年)

・初めての調査ということももちろんあったと思うが、グループ内に1人いる日本語ができる人を通じての調査は非常に大変であった。言葉のニュアンスにズレが生じてしまうが多々あり、より簡単な日本語でわかりやすく伝えることが難しかった。言葉が通じないから話さない、通訳してもらうのではなく、話そうとしたら相手もそれに応えてくれるし、自分も応える努力ができることに気づかされた。今、日本と韓国の関係は良いものとは言えなくなっている。韓国に研修に行くことと決まったときの自分の周りの反応やニュースなどマスメディア等での情報から、今韓国に行くことは危険なのではないか、韓国人は危ないのではないかという思いが強くなった。しかし、実際に訪れてみると、親身になって私たちの調査を手伝って下さり、私たちが韓国で良い思い出を作れるように色々考えてくださった。日本にいて、日本で情報収集しただけではイメージもつかなかったし、現実味を帯びていなかったが、実際に目にする事で得られたものは多々あったように思える。そのため実際に目で見て感じる事の大切さに気づくことができた。自分が少しでも興味を持ったことや気になったことはそのままにするのではなく、何かしらのアクションを起こそうと思えることができた。(法文・2年)

・研修中は韓国の学生と行動することが多かったため、研修内容に関わるだけでなく、様々なことについても話をした。日本から離れて外国の文化に触れてみると日本基準の考えが通用しないことの方が多いということに気づかされた。研修ではそういった日本と外国とを比べて考える習慣を身につけることができた。また、旅行では経験できないような同年代の韓国人の学生との交流

ができた。同じテーマについて話す時でも、日本人と年代別の韓国人学生では考えや物事の捉え方に違いがあったりして、そういう見方があるのかと驚かされることがあった。こういった経験から物事の着目点を変えることで同じ事象でも異なる解釈ができることに気づくことができただけでなく、たまに日本人の考えが外国人と比べて少し遅れているのかと感ずることもあった。年代別の意見を聞くことができたのはとてもいい経験になった。研修で現地の人と関わるという日本では経験できないような多くの経験ができたからこそ、グローバルな視点や能力を得ることができた。

(法文・3年)

・研修を通して学んだことは、現地に行くことの重要性、柔軟に物事を考えること、コミュニケーションの大切さの3つである。今回の研修時、日韓関係は良好ではなかった。このような時期に渡航することに対し、私は少なからず「日本人」に対しての対応が厳しい場面はあるだろうと考えていた。しかし、現地に着き、帰国するまで、不快な思いを抱くことはなく、「日本人」の私に親切な方々ばかりであった。反日の横断幕を見かけることはあったのだが、それに対しても「反日というよりは、横断幕を掲げて政治に関心があると示すことに意味がある。」という意見があった。この意見が全て当てはまるわけではないことは理解しているが、日本にはこのような生きた意見には出会えなかっただろう。何かを介して情報を得ることは「切り取り」が生じてしまう。さらに、過激な情報に「偏る」傾向がある。こうして得た情報から形成される「偏見」や「ステレオタイプ」は行動を起こさない限り覆されにくいものだ。実際に現地に行き、体験することで知っているようで知らない現場を知ることができるのだと考える。理解するためには、自分のものさしで物事を判断しないことが重要だ。異文化にふれると、予測不能な出来事が多々あり、自分のものさしでは到底はかりきれない。無理やり理解するのではなく、丁寧に物事を見ていく必要がある。当たり前の価値観を脱することは容易ではないが、戸惑いを感じた事象をそのままにするのではなく、なぜそのようなことが起きたのか考えていくことで、相手の本質を理解することに繋げることができる。その際には、積極的にコミュニケーションをとることも必要だ。現地に行き、現地の人とコミュニケーションをとり、事象に対して柔軟に考えることが結果的にグローバルな視点や能力を得ることに繋がったと考える。

(法文・3年)

